

「対話」を原理とした社会科授業の開発  
—社会科における深い学びをめざして—

池田 良・伊藤 裕 康

(香川大学教育学部附属高松中学校) (香川大学教育学部)

山城 貴彦

(前香川大学教育学部附属坂出中学校, 香川県教育委員会西部教育事務所)

## I はじめに

複数の利害が絡む微妙かつ複雑な社会的論争問題は、議論を重ねるほど対立を深めることがある。互いの立場を理解しつつ問題解決の糸口を探る社会構成主義的なコミュニケーションとしての「対話」が状況改善に役立つことがある。そこで、「対話」を原理とする授業開発を行った。

## II 「対話」に基づく議論に依拠した「自己内対話」生成を授業づくりの方針とした授業の開発

まず、用語の概念規定を行なった(伊藤 2019)。「会話」は全ての基盤となる関係性を構築する。「会話」による双方の関係性に基づき共有できた話題に一步踏み込んだ見解を示し、共にビジョンを探索するのが「対話」である。「対話」で目的やビジョンの共有が主目的なだけに、「知識の共有」から「意味づけの共有」へ進みたい。「対話」は「自己内対話」が大切である。「自己内対話」は、もう一人の自己と関係性を構築し、共有できた話題への一步踏み込んだ見解を示すことである。自己をメタ的に捉え、「価値観を意図的に衝突させ、それによってお互いに変わっていく作業」でもある。「対話」の成立なしに自分の内面での対話を試みても、一面的な論理を紡ぎ出す独善的思考となり、「自己内対話」が成立しない。また、「対話」では、言葉が発せられた背景を知るために「傾聴」が重要となる。「和を乱す」のを嫌う日本人の議論の可能性を探り、「対話に基づいた議論」を提唱する荒木(2013)は、「議論」の主目的は、共有されたビジョン達成のために今後の方策やアクションの立案を考え抜くこととする。

そこで、「対話」に基づく議論に依拠し、「自己内対話」が生まれる授業の開発をめざした。

## III 「対話」に基づく議論に依拠した手法での授業開発と授業の概要

### 1 地理的分野「附坂中版 災害に強いまちづくり計画」の授業開発と授業の概要

山城と伊藤が連携し、実践が少ない地域調査授業の開発をめざし、中国・四国地理教育研究会(2017. 11. 25, 香川大学教育学部附属坂出中学校)で、北海道から中国・四国まで約 50 名の参加者を得て、丸亀市に移住するならどこがお勧めかを話し合う従来ない大縮尺地図活用のプロトタイプ授業を公開した。両者で生徒の読図可能性を検討し、ポイントとなる微地形の読みとりは 2500 分の 1 の丸亀市都市計画図では難しいと考え、都市計画図を 4 倍に拡大した。公開授業は、生徒が床一面の大縮尺地図上を歩きながらお勧めの場所を話し合った。その様子から大縮尺地図の効果を確信した。だが、人は住みたい所に住む。絞り込みの話し合いは不完全燃焼だった。「知識の共有」は可能だが「意味づけの共有」は難しかった。

この成果を踏まえ、地域を坂出市にしてまちづくりの視点も加え、11 時間完了の防災授業に構想し直した。坂出市 HP に 1/2500 の都市計画図があり、ダウンロードもできる。HP から A0 にダウンロードした都市計画地図を拡大印刷機にかけ、貼り合わせて地区ごとの坂出市街地図を作った。授業は、一班が一地区を分担し、大縮尺地図上を這う、歩く等して等値線(等高線)を引き、微地形を読みとった。作業完了後、各班の地図を貼り合わせ巨大坂出市街地図を完成した。その後、巨大坂出市街地図と市のハザードマップや南海大地震時の内閣府等の津波水位とつきあわせ、多くの避難所が浸水することに気づき、避難所不足を再確認した。次に、地区ごとの人口や高齢者の

割合も考え、避難所設置場所を検討した(写真1)。



写真1 大縮尺地図を見ながら、避難所立地場所を検討する生徒

班で分担作業した地図を貼り合わせて一つの巨大地図にし、避難所の場所選定について議論している。

## 2 「地域の人口変動から迫る現代社会の特色と私たち」(地理+公民)の授業開発と授業の概要

高松市は、3層半円構造(①

中心部の減少, ②中間地域の増加, ③周辺地域の減少)の人口構造である。生徒に馴染みのある②の林地区は市内屈指の人口増加地域である。増加要因に、市街化調整区域の線引き廃止に伴う規制緩和下の農地転用急増による宅地開発と、交通体系の整備等での生活利便施設の増加がある。2005年まで人口増加地域だった③は、高度経済成長期、山の斜面を削る宅地開発で人口が増加し、今は高齢化が進み空き家がみられる。都市と農村の人為的境界である香川県中央都市計画市街化区域と市街化調整区域の存廃は正と負の効果があがり、その分析を十分に踏まえ、人口減少時代の新たなまちづくり政策を考えたい。以上から、池田は、高松市の人口変動を、動態地誌的アプローチから地域性や地域変容を理解させ、地域の課題や将来像を考えられる人材の育成に資する題材と考えた。

池田の相談を受け、伊藤は地理と公民とを融合し、年間で展開する大単元構想と、ワークショップでの授業構想の検討を提案した。県内小・中学校教員に学生も加え、ワークショップ(2019.2.17, 香川大学教育学部)をもった(写真2)。池田の授業構想説明、「えんたくん」活用の授業改良グループワークと全体討議が内容である。ここでは、②より先に③が人口増加したことに疑問を持つはずだから、これから線引き問題に迫ると意見が出された。そこで、なぜ人口減少時代なのに林地区の学校児童生徒数は著しく増加するかを学習課題とし、地形(防災等の安全性)・交通体系の整備・規制緩和(都市計画に関する線引き廃止)・土地利用変化(集約的農業生産の変容)・大型商業施設の出店・地価の6要因を関連づけ探究する

授業を構想した。また、本単元を契機に、「地方自治理想のまちづくりを考えて高松市の予算案を提案しよう」、「財政と社会資本 税金を使って高松市の公共交通機関の整備をさらに進めるべきか」、「より良い社会をめざして エコ・コンパクト+ネットワークシティ高松について新聞にコラムを投書しよう」と、「まちづくり」を軸に年間を通して思考が連続する大単元を構想した。

本単元は、生活経験と社会的事象とを関連づけ、生徒が今の家に住み始めた年と住居形態を色別シールで地図上に貼って規則性を発見することを導入にした。次に、現在の市域となった2006年を基準に、2017年との人口増減率を旧町別地図の主題地図にした。そして、先に述べた6要因から林地区の児童生徒数急増のメカニズムを解明した上で、線引き廃止の是非を判断した。



写真2 授業開発ワークショップ

## IV 成果と課題

成果は2点。第

「えんたくん」活用の授業改良グループワークを発表している。

1に、新たな授業開発手法を示した。授業公開の成果を踏まえたり、ワークショップの成果を踏まえる授業開発という、集団知活用の衆知を集めた授業開発である。開発そのものが、従来あまり見られない「対話」に基づく議論に依拠した手法である。第2に、「知識の共有」から「意味づけの共有」へと進む「対話」に基づく議論による「自己内対話」が生まれる社会科授業像を示した。課題は、「自己内対話」生成の要件の明確化である。

## 文献

荒木寿友(2013)『学校における対話とコミュニティの形成 コールバーグのジャスト・コミュニティ実践』三省堂

伊藤裕康(2019)「香川大学教育学部附属坂出中学校の実践から学ぶ『ナラティブ・エデュケーション』への道」, 竹森元彦・伊藤裕康・毛利猛・小林理昭・山城貴彦・大和田俊編『ナラティブ・エデュケーションへの扉を拓く』美巧社, 25-27